

DN GL

災害看護 Disaster Nursing Global Leader Degree Program

グローバルリーダー養成プログラム

NEWS LETTER

VOL.3

4月2016

C
O
N
T
E
N
T
S

- Message from the president, EAFONS 2016 2
- Education Plan 3
- Enrolled Student Voice 4
- DNGL International Seminar in Chiba 2016 6
- Message from teachers, Health Emergency and Disaster Nursing (HEDN) .. 8



 高知県立大学
University of Kochi

 公立大学法人
兵庫県立大学
UNIVERSITY OF HYOGO

 TMDU
東京医科歯科大学

 CHIBA UNIVERSITY 千葉大学

 日本赤十字看護大学

「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」は、我が国初の国公私立5大学院からなる共同大学院です。

Message

プログラム責任大学 学長からのメッセージ

近い将来に発生が予想される南海トラフの巨大地震の可能性、更には自然災害だけではなく、テロや新型インフルエンザなど未曾有なものへの対策も急務であり、その為には、国際力、学際力を備えたイノベーティブな人材育成が必要です。そこでこれまで災害看護学を牽引してきた高知県立大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、千葉大学、日本赤十字看護大学の国公私立の5大学院が一丸となり、人間の安全保障を共通理念とし、それぞれ蓄積してきた資源を共有し、日本や世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応・解決し、国際的・学際的指導力を発揮し、人々の健康社会構築と安全・安心・自立に寄与する「災害看護グローバルリーダー」の育成に取り組むことに致しました。

皆様方には、本プログラムの災害看護教育・研究の活動に一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

高知県立大学 学長 南 裕子



第19回 EAFONS

平成28年3月14日と15日に、千葉の幕張メッセにて第19回EAFONS(East Asian Forum of Nursing Scholars)が開催されました。EAFONSは、1997年から東アジアで年一回開催されている看護系大学の博士課程修了者、博士後期課程大学院生、若手教員を対象とする国際フォーラムです。DNGL学生は、2日目の昼の時間帯に、

Let's Get Ready for Disaster Risk Reduction: The Sendai Framework for Disaster Risk Reduction 2015-2030 to Action Proposal from Nursing Scholarsと題して、最も大きな会場で情報交換会を主催しました。本フォーラムには、香港、フィリピン、シンガポール、韓国、台湾、タイの東アジアの国ばかりではなく、アメリカやイギリスからも参加者がいました。



教育の構想

共同大学院教育課程

災害看護の高度な実践力の育成

5年間通して実践的な演習を行い、特に1~2年次を中心に実施します。

例えば、長期避難をされている人々の健康調査と健康支援の企画・実施、結果の集計・分析、災害拠点病院や自治体との共同研究などに参画します。

また、他機関協働(行政、病院、学校、企業、住民組織)による地域防災プログラムなどを通して、多職種連携やチームリーダーとしての能力も修得します。

臨地実習指導者、メンター、プリセプターなどの協力体制を整えて、指導にあたります。

教育能力の育成

1~3年次を中心として、単なるTA(ティーチングアシスタント)としてではなく、学生のそれまでの経験等に基づき、個々の学生が継続して教育能力を修得するための企画・実践ができるよう指導します。

教育・研究開発、研究インターンシップ制度により研究能力の育成

異業種・異分野(学問)交流:グローバルリーダーの資質を養うために、「演習」や「実習」において学生の積極的な国内外の異業種交流や異分野交流の機会を数多く設定し、学際的視点を育みます。

3~5年次を中心として、企業や行政との共同研究体制及び研究インターンシップ制度、RA(リサーチアシスタント)制度を取り入れながら、実践的研究能力を養います。

インターンシップの実践性を備えた企画力や開発力の育成

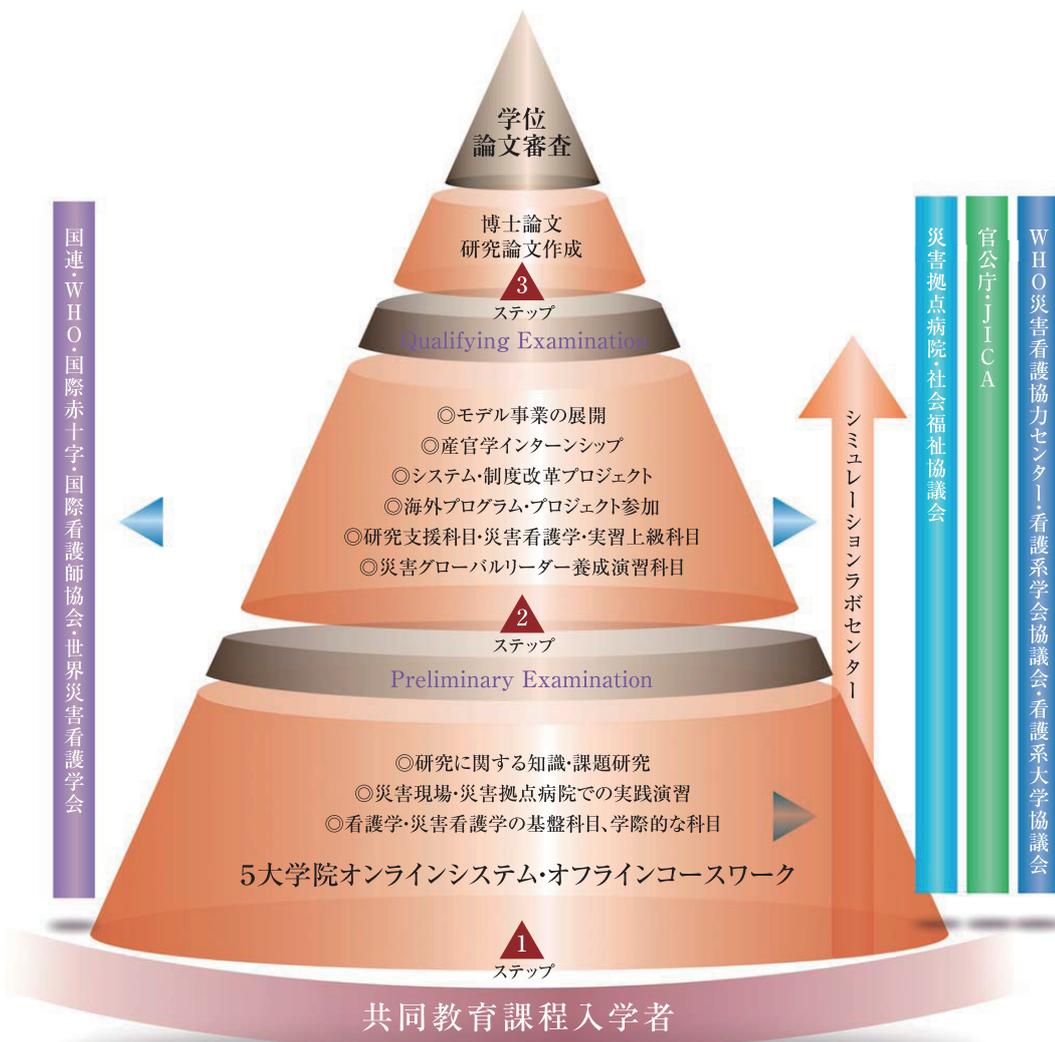
産官学・研究所等から特任教員、非常勤講師による指導やメンター等の環境整備を行います。

これまでの看護職の教育内容としては全くなかった、社会へのアピール方法とアピールの実践、マスコミ対応術や記者会見等のスキルを学びます。

また、「災害看護グローバルコーディネーション論」「災害看護リーダーシップ論」では、アサーティブトレーニングなどの講座、研修、実地訓練の機会を設けます。

養成する人材像

- 3 Step 国際的・学際的な基盤で研究開発し、産官学と連携し、変革に向けて提案推進できる人材
- 2 Step 災害サイクルのすべての段階で「健康に生きるための政策提案」をできる人材
- 1 Step 災害時にもその人らしく健康に生きることを支援できる人材



高知県立大学 University of Kochi



ハストロ・ドゥイナントアジ

ハストロ・ドゥイナントアジです。インドネシアから来ました。日本で勉強することが、ガジャマダ大学看護学部の学生時代からの夢でした。

1限目から授業のある時は、早起きをしてお祈りから1日が始まります。お昼は同級生や先輩たちや大学スタッフと広い学食でいっしょに食べながら、授業のことを話したり、日本語と英語を使ってお互いに外国語の練習をしています。昼食の後は、何人かで課題をしたり研究について議論したりしています。

DNGLの先生方はとても親切でいろいろな面でサポートして下さいますし、研究ベースのカリキュラムにより、直接指導を受けることができるのでとてもいい経験になっています。DNGLで得た知識や経験により、さらに自信をつけ、目標とするキャリアを目指していきたいと思います。



野島 真美

救命救急センターで看護師として働く中で、災害看護に興味を持ち、大学院に入学しました。入学後、直ぐにネパールで大地震が発生し、8月には、実際にネパールに行かせていただく機会を得て、現地の状況を肌で感じ、公衆衛生看護、地域看護を含めた災害看護の必要性を学ぶことができました。9月にはNY訪問の中で9.11家族会の方からお話を伺うことができ、発災直後から中長期を視野にいたれた家族支援について学ぶことができました。

入学してからの半年間は、講義で学んだことを実践でどのように活用するのか、国内や海外のフィールドを通して学ぶことができ、とても充実した日々でした。今後も、講義や演習、国内外での学びを大切に、学習したことをどのように実践や研究に活かしていくのか考え、自分の研究テーマに関してもグローバルな視点で深めていきたいと思っています。

千葉大学 Chiba University



関口 貴恵

DNGLに入学して、災害看護や災害医療を第一線の専門家から直接学び、また関連する境界領域の専門家や、実際のフィールドからも学ぶことで、多くの知識を総合的に関連づけて身につけることができました。また、研究課題に正面から取り組み、丁寧な指導を受けることで、言葉の意味を考える力や説明する力など、実務だけでは学ぶことが困難な能力を伸ばすことができました。自分が取り組んできた「病院防災」を探求し、大学院での研究成果を他の人々により良い形で還元できるよう、今後も前向きに励んでいきたいと思っています。



中島 麻紀

「人間の安全保障」の実現に貢献したい、という思いからこのプログラムに入学して半年が経過しました。TV会議システムを生かした幅広い分野の先生方からの講義や仲間との議論、学術研究会での発表等を通して、研究者として自分の考えを他者に伝える力や課題を発見していく力を身に付けてきました。また、研究を通して自分が世界に発信したいことは何かということに日々向き合っています。他分野の方々から災害看護分野への期待の声を伺う機会も多く、自分たちの役割と責務を肌で感じています。今後も初心を忘れず、同じ志の仲間と共に多くの知見やスキルを修得していきたいと思っています。

兵庫県立大学 University of Hyogo



有坂 めぐみ

私は兵庫県南あわじ市の出身です。1995年阪神淡路大震災の際は高校生で、何が起これ、どうなっていくのかさえも分かりませんでした。神戸で看護教育をうけ、就職しました。その神戸での生活はまさに災害からの復興とともにありました。その後も日本国内を含む世界中で災害が多発し、苦しんでいる人々が大勢います。特に、私は助産師でもあるので、世界中の女性や子どもの人生がよりよいものであることを強く願っています。看護職は、人々の疾患や何か一部だけを見ることはせず、全人的に理解し、文化も役割も未来まで看ます。DNGLでしっかり学び、ひとりでも多くの方が笑顔で過ごすことができるようになりたいです。



稲垣 真梨奈

阪神・淡路大震災の被災経験から、災害看護に関心を持ちました。留学経験を通し、世界における日本の先人達の偉大さを感じました。我々はそれを後進に繋いでいく使命があると思います。日本の精神を根幹に、直面している地球全体の問題に、我々は世界の人々と協働していかなければなりません。

この5大学連携プログラムは画期的です。先生方は世界の拡がりリーダーとしてのあり方を示してくれています。世界との繋がりの中で何を感じ、考え、どう成長するか、また、世界各地で発生する災害に対し、災害大国である日本の看護師として自分は何が出来るだろうかと自問自答を繰り返しながら研鑽していきたいです。

日本赤十字看護大学 Japanese Red Cross College of Nursing



小林 千紘

大学院に入学し、あっという間にも果てしなく長いようにも感じた最初の半年でした。災害に携わる看護師としての実践的な部分と、それを学問として大学院で学ぶという研究的な部分とを統合する事の意味と道のりの険しさを感じ始めているところです。豊かな実践経験を持つ同級生と共に学べ、5大学それぞれの特色が活かされた講義や研修等を受けられる環境に5年間身を置く事で、広い視野で災害看護を考え、挑むことが出来るようになりたいと考えています。



山内 万裕美

私は、青年海外協力隊として活動し、異文化を理解しマネジメントする難しさを感じ、もう一度学びたくこのコースに入学しました。現在は、リーダーシップのあり方や多職種連携など実践に基づいた学習をし、経験を振り返り再考しています。長期休暇には、英語での抄録作成に挑戦したり、実際に復興期の保健事業に参加するなど、課外でも多くの学びを得ています。また、国際会議や国際学会に参加し、世界の潮流に触れ、グローバルな視点について考えることもできました。今後は、これらの学びを自分の研究テーマに引きつけ、災害看護についてさらに深く学んでいきたいと思っています。

東京医科歯科大学

Tokyo Medical and Dental University



TMDU

東京医科歯科大学



菅原 千賀子

入学して半年が過ぎましたが、まさに「駆け抜けた」といった印象です。毎日が災害についての学びで、時にはマニアックかな？と思いつつも災害看護という分野の多様性とその役割の重大さを痛感する日々を過ごしています。私自身は臨床現場から遠ざかっていた期間もあり、勉強は本当に大変ですが、様々な専門性や視点の異なる意見に触れ同期や先輩方、先生方に支えて頂きながら楽しく学ばせて頂いています。

災害で傷ついた人々のために自身に何ができるのか。看護の独自性を考えながら自己研鑽を重ねていける素晴らしい学びの場であると考えています。



宮前 繁

生活の中心が病院から大学院へと変わり、国際的な学会への参加や英語での授業など、生活の大きな変化に戸惑う日もありました。しかし、先生方と先輩方に支えられ少しずつではありますが、現在の生活に慣れてきました。それと同時に、戸惑いの中に多分野の先生方から直接学ぶことのできる環境へのありがたみや楽しさを感じるようになりました。中でも特に、多くの「出会い」が私にとって一番の喜びとなっています。「災害」というキーワードの元で、看護師はもちろん、その他の職種・年齢・居住地、または国籍・人種を問わず、似た志を持つ方々と出会え、様々な視点から意見交換を行える事はとても良い刺激になります。またこれは、五大学の連携やグローバルネットワークを持つ DNGLだからこそ行えている事であると思います。

H27 年度国際セミナーと学生自主ゼミの開催

2016年2月13日(土)、DNGL千葉大学が主催となり、「災害時の多機関連携におけるリーダーシップ」をテーマに国際セミナーを開催しました。各種の災害時においては国際機関、行政、軍、民間、NGOなど多くの組織が連携していかなくてはなりません。そこで、災害看護、人道支援、緊急国際支援の領域からそれぞれDr. Tener G. Veenema(ジョン・ホプキンス大学看護学部)、Dr. Gregg Greenough(ハーバード大学医学部)、勝部司氏(独立行政法人国際協力機構 国際緊急援助隊事務局)をお招きし、災害時に多機関が連携する際の問題点とリーダーシップについて学ぶ場となりました。

翌2月14日(日)、上記3講師とDNGL学生が、「災害看護グローバルリーダーに求められる能力とは何か」について学ぶセミナーを開催しました。講師の実践経験から多くの学びを得ると共に、特に災害看護を専門とするDr. Veenemaからは、具体的なキャリアパスが示されました。学生からは、災害時における弱者を看護師としてどのように守ったらいいのか、といった質問が投げかけられました。このゼミは全て学生が企画し、当日の運営や司会進行も全て学生が英語で行ったゼミでした。



日本災害看護学会

2015年夏に開催された日本災害看護学会第17回年次大会に参加し、1年生は「東日本大震災における支援は、その場・その人に役立つものだったのか?」、2年生は「過去の災害から学び、備え、未来につなげる～Let's share your activities～」というテーマで交流集会を開催しました。それぞれ会場の参加者の方たちと活発に意見交換することができ、過去の災害での経験や得られた教訓、組織の災害対策などを看護職全体で共有し、社会に還元していくことの重要性を感じることができました。また、DNGL学生数名が研究発表を行いました。次大会でも交流集会開催、研究発表をし、その成果を形にしていけるように、今後も学生同士良い刺激を与え合い、活発に活動していきたいと思えます。開催地仙台の街ではちょうど華やかな七夕祭りの時期と重なったこともあり、東日本大震災からの被災地の復興を実感し心を寄せる機会にもなりました。



UNISDR Science and Technology Conference 参加

2016年1月27日～29日にジュネーブで開催されたUNISDR Science and Technology Conferenceに参加しました。この会議は仙台防災枠組2015-2030の目標を達成するために、科学技術がどう貢献すればいいのか、科学技術者とリスク削減に携わる実践家が召集された初めての国連会議でした。仙台防災枠組は兵庫行動枠組に比べて、「Health」という言葉が多く使われています。会議では、研究やグッドプラクティスが共有され、早期警報システムの報告が多い中、人中心の考えが徐々に浸透し、ハード対策だけではなく、ソフトの対策も合わせて行っていくことが重要であるということが再認識されていました。

我々は、関連するグローバルアジェンダであるSDGsやCOP21も含めて地球規模の問題に取り組んでいかなければなりません。研究者として求められているのはエビデン

スに基づいた提言と実践の両側面でのアプローチです。データ収集や実施・レビューをし、仙台防災枠組を達成できるようにDNGLから貢献していかなければならないと強く思いました。



フィールドワーク



東日本大震災は、自然災害に放射線事故が加わり甚大な被害を及ぼしました。巨大地震の発生が今後も予測されており、大災害に加え放射線災害への備えの重要性が強調されています。

伊方原発に隣接する保健所でフィールドワークを行いました。実際に村の中を歩いてみると、狭い急勾配の道が続き、地震で倒壊しそうな空き家もあるようでした。もし、巨大地震で原発事故が起こると、短時間での安全な避難は非常に困難を要すると思われました。すでにこの地域の避難計画は立てられていると伺いましたが、安全な避難をするためには、住民参加型訓練の積み重ねが必要だと思いました。

また、保健師の活動に同行することで、地域住民の災害に対する考えに触れることもできました。住民の方は、「なるようになるわ」とか、「水は山に汲みにいったらええ」などと応えており、この地域の自然環境とともに地域にあった対応を考えることの重要性を学びました。

教員からのメッセージ



Message

ステップ1のその先の成長を期待して

DNGLプログラムの2年目をふり返ると、1期生にとっては最初の節目の年で、実践課題レポートの研究の取り組みと Preliminary Examinationはビッグイベントでした。成長した実感を味わったと同時に課題も見えたと思います。また、フィールドに出かける機会が多くなり、現場を自分の目で確かめることの重要性も実感されたことでしょう。

2期生は、インドネシアからの留学生が加わり、異文化理解がより日常事として学べたことと思います。それに先輩がいることの心強さも感じられたことでしょう。

学会参加を通して学生皆で企画運営する機会もいくつかありました。次につながる学習になることを期待します。学生と共に私自身も学び続けていきます。

Learning Together for Working Together.



日本赤十字看護大学教授
田村 由美

看護として果たすべき防災・減災の役割の探求 ～地域での活動を通して～

災害時において、公助よりも自助・共助の取り組みが重要視され、仙台防災枠組2015-2030においても、災害のリスク削減には全社会型の参画と協力強化が必要であるとされています。東京医科歯科大学は文京区、千代田区に位置し、東京駅にも近いことから多くの企業が立ち並ぶオフィス街としての特徴を有しています。これらの地域では東日本大震災発生時、帰宅困難者の問題が表面化しました。様々な自主防災組織の取り組みや活動に積極的に参加しながら、区民、ボランティア団体、企業との連携を深め、看護として果たすべき防災・減災の役割を日々、学生と一緒に模索しています。これからも一緒に学際的、国際的視座から看護としての役割を発信していきましょう。今後の活動もとても楽しみにしています。



東京医科歯科大学准教授
三浦 英恵

HEDN について

世界初、 災害看護国際学術雑誌HEDNスタートし3年が経ちました!

看護職は災害の現場において、発災直後から復興に向け、あらゆる年代の個人および家族、集団、コミュニティを対象に、幅広く活動してきました。そこで災害看護の知を集積し世界へ発信するために世界初の災害看護国際学術雑誌Health Emergency and Disaster Nursing (HEDN)を立ち上げ、すでに3年が経ちました。HEDNはオンラインをベースとしたジャーナルで、投稿、掲載料は無料です。

災害看護の知を結集し、リアルタイムの情報を発信するため、教員、研究者、臨床家、学生、活動家など、様々な場で尽力する方々の原稿を募集します。

詳細は

<http://hedn.jp>

